

## 評論

宮沢 昭男

21世紀が四半世紀を過ぎた。生成AIが本格稼働し、せっかく身に付けた技術も、分野によってはあっさりAIが取って代わる。芸術音楽の共有に、伝統的な音楽から新作品まで、今までどおりでよいのか戸惑う。ましてAI時代に生まれ育つ新しい世代の感性は、計り知れない。いずれにしても音楽の創造と表現は、確実に多様化する。

一方、世界の指導者たちも、AIを前に手をこまぬくわけがない。AI軍拡競争、情報操作、文化の制度的統制を繰り返すのは歴史の必然。ちょうど100年前、わが国の情報革命の一つ、ラジオ放送が開局した。開戦直後ラジオ電波に乗せて、リヒャルト・シュトラウスの「祝典曲」が日独を結び、同盟関係を強化する。結果、日本は人類史的な悲劇を2度体験した。技術は国家権力の性質により、機能が変わる。

私たち世界市民の手には、良識と国境を軽々越える音楽の2つがある。多様化する音楽表現を丁寧に言語化し、共有可能な地図を描く。そして、技術革新に揺れ動く価値観の中で、芸術の意味と倫理を問い続ける。芸術の自由のために、音楽評論の果たす役割は決して小さくない、と私は考える。

パンデミックを経て、音楽家と主催者はプログラムを刷新した。また同じプログラムでも、表現の様式を大きく変えた。後者の場合、一般の聴衆・観衆も含め、受け手の間に批評性を欠く例が少なくなかった。だが音楽家は手を緩めない。批評媒体も徐々に変化し始めた。背景に執筆陣の若返りもあるのだろう。

以上の視点から、2025年の評論を俯瞰する。

『音楽の友』2月号は、新国立劇場ロッセーニ『ウィリアム・テル』(前年11月)公演評を掲載した。テーマは愛と自由。岸純信は、ヤニス・コックス演出の鍵を、舞台の巨大な2種類の矢印型オブジェに読み解く。支配者層による人権蹂躪の圧力は空から、民衆の悪代官への憤りは、下から上に具象化し、視覚化された、と。現実を捉えるロッセーニの目を実に生々しく描く。欧州では元来、オペラも歴史を動かす歯車だったと再認識させた。

2月には2つの『カルメン』が従来の殻を破った。東京二期会イリーナ・ブルック演出の舞台は、近未来。設定の趣旨が分かりづらいなか、「社会問題も想起させる“苦み”」とした(加藤浩子、『音楽の友』4月号)。評者のより掘り下げた踏み込みがあれば望ましいだろう。

新国立劇場アレックス・オリエ演出『カルメン』再演も異色だ。現代日本のアリーナに設定する。「キリスト教の縛りと奔放なロマ族の対立」。「日本のタテ社会と国際アーティスト、アスリートの自由な世界のヨコ構造との対比」と読み解く(池田卓夫、『同』同号)。焦点を提示する評者の誠実な姿勢が見て取れる。

7月東京交響楽団定期は、ジョナサン・ノット音楽監督指揮、ブリテン「戦争レクイエム」だった。ラテン語のレクイエム典礼文に自国英語の反戦詩を加えた作品だ。批評媒体はいずれも、現実の世界を見据えた公演評を掲げ心に響く。

「ブリテンの筋金入りの反戦主義」と、「一向に終わらない戦争」(伊東信宏、『朝日』7/31)。「現実の殺戮に祈る虚しさ」。「戦争の時代に…自分は人間たらんと平和を祈りたい」(齋藤俊夫、『メルキュール・デザール』8/15)。無力さを感じながらも、人の生き方を再確認させる言葉が読み手の倫理観を正す。

8月新国立劇場・新制作初演『ナターシャ』は、戦後日本の音楽文化の新たな到達点を示した。『メルキュール・デザール』9/15配信は、批評を複数掲載した。7つの地獄を現代の「吊鐘」ととらえ、「我々はいかに『自らが対峙している地獄』を生き抜くべきか」考えさせた(齋藤俊夫)。「単に世界の悲惨を嘆く贅沢な身ぶり」ではなく、「人間の種としての可能性を力業で垣間見せる〈傑作〉」(内野儀)。

山崎浩太郎(『日経』9/11付)は、絶望的状況下「異なる言語の共存と相互理解と親愛が、作品の大きなテーマとなる」。「地獄とは、人間の醜い強欲と傲慢、その結果の自然破壊」。

作品の底流に、芸術監督/指揮・大野和士、台本・多和田葉子、作曲・細川俊夫の世代共通の問題意識が横たわる。

続く11月には、大野芸術監督はベルク『ヴェッツェック』新制作初演も指揮した。森岡実穂は、「傑作の持つ現代性を見事に描き出した」。「強者から弱者への暴力、そして貧困のもたらす精神の疲弊を描き出す」。「貧困と格差が拡大しつつある2025年の世界に重く響く」(『しんぶん赤旗』12/12付)。

今や日本も、音楽家、享受する側ともに、芸術から過去だけでなく、現在を読み解き、未来に思いをはせる感性にあふれている。クラシック音楽観が変化しているのは明らかだ。

昨年も触れたが、文科省は今なお学習指導要領指針に、19世紀のハンスリック著『音楽美論』をすえる。ハンスリックは音楽を形式としてとらえ、上記21世紀の音楽状況をとらえきれない。見直す時期ではないだろうか。今世紀にふさわしい音楽観が望まれる。

注目の書籍も並んだ。3冊取り上げたい。

井上登喜子著『オーケストラと日本人』（アルテスパブリッシング刊）は、日本のオーケストラ文化100年を総括した。労作だ。昭和戦前期は旧制大学学生オーケストラ、戦前・戦後はプロオケ、20世紀から今世紀にかけ、海外を含む3団体をデータ化した。膨大な演奏会データをもとに、次の2つを実証的に分析した。日本のオーケストラが「レパートリー作品」と、権威的な作品としての「正典」をいかに作り上げたか。

そして現在のオーケストラ事情を、プログラムの停滞と、固定客の高齢化問題として把握する。社会学者ブルデューの「象徴資本」概念を取り入れ、突破口を探る。「レパートリー作品」「正典」のほかに、同時代の音、時代の声を聴く視点が加わると、日本人の感性はさらに鮮明になるだろう。

亀山郁夫著『ショスタコーヴィチを語る—亀山郁夫対談集』（岩波書店）。わが国の論客が興味深い対話を繰り広げた。当該作曲家の評価は生前から二分し、ヴォルコフ著『証言』が出ると作品解釈は大きく変わった。芸術家の二重性が話題になる。作曲者の本音やスターリン批判を鮮明にし、議論を先に進めた。亀山のテーマ、ロシア・アヴァンギャルドに継ぐ全体主義時代の文化論研究の対象に位置付けた。昨今のショスタコーヴィッチ人気は、現代の閉塞感が彼の体験と重なるのだろう。

田邊稔著『田邊稔の日本フィル物語』（ポトス出版）。著者は2つのオーケストラ倒産を体験した。問題意識は楽団活動の継続維持である。1972年の日本フィルハーモニー交響楽団解散と分裂を教訓に、問題を社会化し“解剖学的”に取り組んだ。そして、オーケストラが文化として根を張るには、演奏技術だけではない。オーケストラのインフラ整備に音楽家が自ら参加し、社会に発信する必要を説いた。

#### 宮沢昭男（みやざわ・あきお）

1955年生まれ。社会学修士。1987-88年ベルリン・フンボルト大学留学、芸術学部Dr.C・カーデンの下で音楽社会学を研究。1992年、法政大学大学院社会科学研究所社会学専攻博士課程単位取得退学。「A・ドヴォルジャークの音楽における民族主義」（関東社会学会第4号1991年）。S・ラッシュ『ポスト・モダニティの社会学』共訳（法政大学出版会、1997年）。“Sonnenaufgang? Die Situation der japanischen Orchester” in Das Orchester 2003。ミュージック・ベンクラブ・ジャパン会員 三菱UFJ信託芸術文化財団・理事